

昨年度と今年度の神宝小道徳授業地区公開講座に講師としてお声をかけていただき、保護者の皆様にお会いできますことを楽しみにしておりましたが、2回とも講演会が中止となり、とても残念に感じております。しかしながら、この紙面をお借りして講演会でお伝えしようと思っていたことを書いてみたいと思います。

未だ収束の道筋が見られない新型コロナウイルス感染症は、ここ2年余りの私たちの生活を大きく換えました。2020年初頭に始まった第1波の時には、現代の医学でも対応できない未知の感染症ということに世界中が驚異し、不安に慄きました。2020年3月から4月にかけての緊急事態宣言では、欧米のようなロックダウンという法規的な処置ではありませんでしたが、社会生活が停止され、普段の買い物でさえ気ままに行くことができない状態になりました。これからどうなるのかと思っていた時に、夫が「昔も今も変わらないねえ。」と1冊の本を見せてくれました。それは、デフォー(ロビンソン・クルーソーの作者です)の「疫病流行記」*でした。これは、1665年にロンドンで起きた疫病(ペスト)の流行を記録の形をとった小説です。当時は、細菌やウイルスによる感染という概念はなく、現代のような薬剤もなかった時代ですので、今よりももっと恐怖を感じていたことでしょう。感染した人やその家屋や地域を監視し封じ込めを行うことでくい止めようするさまや無症状感染者による感染拡大の様子は、現在私たちが日々直面していることとほとんど変わらないということを知りました。さらに妊娠中の女性や母と子が辛い環境におかれたことが書かれていました。この度の新型コロナウイルス感染症においても、特に子育て中の家庭に大きな負担がかかったことは周知の事実です。子どもたちがすでに成人し、育て終えたという状況の私でも不安を覚えるのですから、子育て中の親御さんの心中は想像するに余りあります。この未曾有の事態が、子どもたちの育ちに悪い影響がなければいいなと願うばかりでした。

緊急事態宣言が解除になり、5月も終わりのころ車で外出しました。うつうつとした毎日を過ごす中で、田んぼに植えられた青々とした稲の苗が目に入った時のことです。私の住んでおります茨城県南部は、利根川から筑波山まで平野が広がり、豊かな稲作地帯となっております。ですので少し車を走らせれば、広々とした田んぼが見ることができます。その時「何も変わってはいない。苗はいつも通り大きくなり、稲穂をつけることは変わらない。」と改めて気がつきました。私たち人間がコロナにおびえ、世界が、生活が変わり不安な日々を過ごしている時でも、自然はその動きを止めることはありません。子どもたちも同じく、その成長を止めることは誰もできないのではないかと、どんな環境でも子どもは子どもなりに成長していくのだろうとなぜだか安心したことを覚えています。

だからこそ、私たち大人が子どもたちに伝えていかなければと思います。稲は、雨や風、時には夏の暑さにも耐えて秋にはしっかりと実をつけるように、今は苦しいけれどあなたたちの成長は誰にも止められないということをです。子育てとは、子どもたちが苦しみに合わないよう、困難なことを取り除くことではなく、子どもたちがたくましく、その子らしく自分で成長していくことを見守り、“必要な時”に手を貸すことなのかもしれません。難しいなと思われた時、ぜひ、わが子が生れた時のことを思い出してみたいかがでしょうか？いろいろな期待や不安もありましたが、生れてきたその時には、「元気で育って欲しい」「幸せになって欲しい」という祈りにも似た気持ちだけだったのではありませんか？ぜひ子育ての原点を思い出して、親の役割を考えてみてください。もちろんそのためには大人が、親が元気でいることが重要な基盤になると思います。どうぞ育てる側の保護者のみなさまご自身の体と心も大切になさってください。